

第6章 「それ以前の困難」を伝えるために

岩手県・岩手レインボー・ネットワーク

山下梓さん



実施日：2018年9月25日 聞き手：杉浦郁子・Natasha Fox

実施場所：弘前市内のカフェ

【プロフィール】

1983年生まれ。岩手県出身。大学教員。東日本大震災の約1週間後に「岩手レインボー・ネットワーク」を設立。2016年に「高知ヘルプデスク」とともに『にじいろ防災ガイド』を発行。

1. 「岩手レインボー・ネットワーク」設立

◆発足の経緯

2009年に岩手にUターンしました。戻ってしばらくはアルバイト生活で、時間があつたので、地域の女性センターの講座に出入りするようになりました。「女性のため」というけれど、「レズビアンやバイセクシュアル女性のことは考えているのかな」と探りたくて。そこで知り合った女性センターの方に、大学の求人を紹介してもらい、ダメ元で応募したら運良く通りました。

その仕事で偶然に知り合った方と、「岩手にLGBTのグループはありますか」という話になりました。オンラインでも見つけられず、その方も同じようにおっしゃっていて、「ないんだったら、自分たちで始めてみましようか」という話を、2010年の秋頃にしています。

でも、「しましようね、しましようね」と言っているうちに年が変わり、2011年の3月になってしまった。震災の翌週にお会いして、「セクシュアル・マイノリティで困っている人がいるかもしれない」「じゃあ、今始めましようか」ということになりました。その方は、とても謙虚なので、ご自分が立ち上げに関わったことをおっしゃらないんですけど、私1人だったら始められていなかったです。

◆発災後の数日

発災時は、職場にいました。地震が起きると電話が繋がらなくなるのは知っていたので、揺れが始まったときに、レストランで働いている外国人の友人に机の下から電話しました。

「揺れが尋常じゃない。今後、生活が大変になるかもしれないから、買い出しをしておいたほうがいいよ」と。そのあと、電話は通じなくなりました。みんなで建物の外の駐車場に出

て、そこでしばらく大学からの指示を待ちましたが、その間も揺れていました。携帯電話のテレビでNHKの放送を見て、津波が来ることは知っていました。

しばらくして職務専念義務免除になったので、母のアパートに帰省していきょうだいの様子を確認しに行きました。部屋の中はぐちゃぐちゃで、きょうだいはフリーズしていました。震度は、5強ぐらいだったのですが、母のアパートは壁に亀裂が入って、ガス、電気、水道は止まっていました。きょうだいを連れて、まだ空いていた近くのお店に食べ物を買っている間に、高齢者施設で働いていた母ともメールで連絡が取れ、「施設の人が、乾電池とかホッカイロとかを買ってきてほしいと言っている」ということで、ドラッグストアで入手しました。

そのときは、まだ路線バスが動いていたので、バスで母の職場に向かい、買った物を届けました。母の仕事が終わってから、母の車で戻ってきたのですが、余震が続いていて、亀裂が入っているアパートの2階で過ごすのは、すごく不安でした。本当は、母の職場の施設に3人でいられたら安心だと思いました。でも、施設の近隣の人たちがたくさんいらして、とても避難できる状況ではなかったなので、あきらめました。不安なとき、人が集まっているところにいたいのは、みんな、同じなんですよ。

私は、そのとき母とは別に、同じ市内に自分でアパートを借りていました。その部屋が1階で、都合が良かった。水を汲み上げるのに電気がいらぬ。電気が止まっても水が出ました。プロパンガスですから、ガスも使えました。県庁や市役所に近くて、電気が戻るのも早かった。2日目ぐらいには戻ったと思います。それで、母もきょうだいも私のアパートに来て、5月ぐらいまで一緒に暮らしました。

食べ物は、母の冷蔵庫に入っていた食料を持ち出したり、職場に置いていたお菓子をもつて帰ってきたりして、何とかなりました。私のアパートの近くのコッペパンのお店は、いつも開いていたので、朝一番に並んで、買っていました。

盛岡でも物不足で、スーパーに並んだ記憶があります。沿岸のほうから盛岡まで来て、物資を調達して戻ろうとする人や、それほど被害のない盛岡の人も、食べ物を得ようとして、どこのスーパーでも開く前から行列が……。殺伐としていました。

週明けの月曜日(3月14日)は、仕事に行きました。春休みで帰省している学生も多く、担当の人たちが安否確認をしていました。外国人の教員には、出身国の大使館から電話がかかってきて、英語の場合は、サポートに回ったりしました。沿岸部出身の職員は、実家に戻って、家族を探したりしていたと思います。

◆ブログでの情報発信

震災の翌週に、職場の知り合いと近くのカフェであって、活動を始めましょう、ということになりました。「こんな状況だし、できることといっても限られているね」「最初はブログで情報発信をして、『困っていることを教えてください』といったところからしか、始められないかしら」と話し合いました。私は、わりとブルドーザー式というか、何に気を付けたらいいか、といった細かなことに気がつかなくて、「とりあえず始めればいい」というふうに思っていました。知り合いは、慎重で、「グループにアクセスするだけで、アウトティング

の危険にさらされる人もいるかもしれない」ということに、きちんと思い至る人で、そういった注意事項なども相談しました。ブログで発信を始めたのは、3月19日でした。

岩手レインボー・ネットワークは、被災地で困っている LGBT 支援のためだけのグループだと思って、立ち上げたわけではありません。ただ、あの状況で、それ以外のことをする、というふうにはとても考えられなかった。だから、「被災した LGBT のためだけではないけれど、当面は向き合うことはそれです」ということでした。

2. 混乱期の活動

◆ブログへの反応

ブログへの反応は、なかったんですね。そんなこと、よく考えたら想像がつくことなんですけれど。1人ぐらいだった。それも、「被災した地域で困っている LGBT の人がいたら雇用してあげる、と言っている人が東京にいる」というメールだった。自分が困っている、という当事者からは、しばらくなかった。

でも、それは自然なことです。そもそも通信環境が悪かったです。携帯電話ごと流されている人がいっぱいいて、電話が手元にあっても基地局が流されて。電波がつかない状況にいた、いちばん困っている人がいちばんつかない。ブログの呼びかけに音沙汰がなく、初めて「ああ、そうか」と思いました。

「被災した」という認識は、本当に人によってそれぞれなんです。これくらい規模の大きい災害だと、「家族を亡くしている人がいちばん大変だ」という認識の人が多。だから、「家を流された」とか「仕事がなくなった」程度では、「自分は被災している」と捉えない人もいました。メチャクチャになった町に暮らしているんだけど、自分の家は大丈夫だった、職場は大丈夫だった、という人は、「自分が被災した」という理解になかなかならない。

岩手県の南のほうに住んでいて「被災した町で暮らしているけれど、自分は被災していない」という人が連絡をくれるまでに、数か月かかっています。確か震災の年の12月ぐらいにアクセスしてくれましたが、被災の認識がないわけなんです。

「仮設住宅に住んでいます」という人がアクセスしてくれたのは、4年目のことです。でも、その人も「被災した」という認識に乏しくて、「そうは言っても、もうすぐ新しく建てた家に入れるし」とか「家族を亡くしてないし」とか、そんな感じだった。

その方が連絡くださったのは、2015年に、盛岡市から助成を受けて市民公開講座を開催したときでした。「ずっとブログを見ていた」「関心はあって、行きたいと思っていたが、どういう人がやっているのか、どういう人が来ているのか、不安だった」「『岩手日報』の催事案内に掲載されるようなグループだったら、行っても安全だと思った」とおっしゃっていました。その方は、沿岸部の40代くらいの方でした。

もちろん信用の問題もあるし、情報格差の問題もある。世代のこともあるし、経済的にオンラインにアクセスするのが難しい人もいる、といったことを考えると、いろいろな媒体に情報を載せる必要があるな、と思いました。

◆もりおか女性センターの「デリバリーケア」

私たち「岩手レインボー・ネットワーク」は、避難所支援に入れる立場ではありませんでした。避難所に入るのは、大変なことで、自治体や支援団体の職員のように、しっかりしたところの人でないと支援に入りにくい。あとは、職業団体ですよ。医師会とか助産師会とかの人たちが、どんどん入っていった。そういう状況で自分たちが行って何の役に立てるか、できることの中で何か効果的なことはないか、と考えていたときに、もりおか女性センターでデリバリーケア¹が始まりました。

それは、沿岸部の被災者一人ひとりのニーズに合わせて、支援物資を届けるというプロジェクトでした。たとえば、避難所に届けられる女性の下着はMサイズばかり。でも、Mサイズはきつくて使えない人がたくさんいた。化粧水がほしいとか、ハンドクリームがほしいとか、避難所で言ったらわがままだと言われて、ニーズとしてあがってこない。そういうニーズに個別に答えよう、という事業です。その物資の仕分け作業がある、ということで、岩手レインボー・ネットワークと一緒に立ち上げた方と2人で、女性センターに手伝いに行くことにしました。

そのさいに、女性センターの人に、「個別の支援をリクエストした人の中に、リクエストしたものと結びつけられている性別と、本人の見た目が違う人もいるかもしれない」「だけど、それを不審な人と見ないでほしい」「トランスジェンダーの女性や性別の表現が中性的な人、典型的な男性・女性ではない人からの声かもしれないので」「もし、いたときには配慮ある支援を」という話をしたりしました。

そのプロジェクトが始まったのは、たぶん5月くらいかな。3月中は、車両規制がされていて、自衛隊と緊急車両が優先で、あとは、被災した人の家族が自己責任で入っていくような状況でした。ガソリンも一般の人が入れてもらえる量が限られていて、遠くまで行けなかった。そういう意味で、沿岸部に入れる人は限られていましたが、5月ぐらいにそれが解消された。だから、女性センターのプロジェクトが始まったのも、それくらいの時期だったと思います。

◆共生ネットによる内閣府への要望書²

要望書に対する賛否両論がありました。私は、今、冷静になって考えたら、必要なことだったと思います。しかも、タイムリーに出ていることに意味があった。私も、岩手の助産師会が避難所に配布する注意喚起チラシを作るのに関わらせてもらったのですが、発災から日の浅い時期でした。おそらく、いろいろな団体から要望書が関係各所に出ていたはずで、みんな動いていました。そのタイムリーさにインパクトがあった。共生ネットの要望書が震災から1年後とか2年後に出ていたとしたら、賛否両論でさえ、たぶん起きなかつただろうと思うんですよね。

¹ デリバリーケア：もりおか女性センターの指定管理者の「NPO 法人参画プランニング・いわて」が始めた支援事業。

² 要望書：「東日本大地震の被災地におけるセクシュアル・マイノリティへの対応に関する要望書（第2版）」（2011年3月17日）のこと。「共生社会をつくる」セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク（共生ネット）が、緊急災害対策本部（内閣官房長官 枝野幸男氏）宛てに提出した。

要望書によって避難所にいる当事者があぶり出されてしまう、という批判がありました。が、似たようなことを、尾辻かな子さんの参議院選挙(2008)のボランティアをしたときに聞きました。「尾辻さんが選挙に出ることで、自分がセクシャル・マイノリティだということが誰かにばれるのではないか、という恐怖感を覚えている人がいる」ということでした。

避難所で共生ネットの要望書を見て、「セクシュアル・マイノリティの当事者は、どこにいるんだ」と探そうとした人もいたかもしれない。だから、配慮が欠かせないのはもちろんなのですが、それでニーズを言わないことにしているのか……。

岩手県内の別のグループが LGBT イベントをしたときに、イベントが実施される地域に住んでいる人が「こういうイベントをされることで、自分がセクマイだということがアウティングされる」とおっしゃったんです。それで「それは、どういうふうに結びつくの?」と話をしたことがありました。その人の中では結びつくし、その恐怖感それ自体は本物だと思うのですが、でも「あなたにカミングアウトして」と言っているわけではないし、「イベントに来て」と言っているわけでもない。

この問題を整理して、課題の見える化をしていかなければいけない状況がある、と思っています。

3. 岩手レインボー・ネットワークの学習交流会

◆場づくり

2011年の7月から、つながるための場づくりをしなければならない、ということで、学習交流会を始めました。最初の交流会には、上川あやさん(世田谷区議)に来てもらいました。東京にいたときから知り合いだったので、「こういうグループを始めて、こういう目的で学習会をしたいので、ぜひ話題提供を」とお願いしました。

震災後、世界中のいろいろな人からメールが来ました。個人的な安否確認だけでなく、「サポートしたい。何かできること、ありませんか」という連絡や、海外の LGBT メディアからの取材もたくさんありました。その中に、アルゼンチンの LGBT 系の会議で会った、アメリカ人の男性がいました。彼は、人道支援が専門で、私が日本から来ていたことを覚えていてくれて、ハイチ地震(2010)で支援活動をした国際 NGO につないでくれました。

2011年5月に Skype でその NGO の方とやり取りをし、「グループを始めたいけれど閑古鳥。情報は発信しているけれどアクセスされない」と相談しました。その方から、「ハイチも保守的なところで、災害があった直後に LGBT コミュニティの支援に入ろうと思ったけれど、地元の LGBT の人がどこにいるのかわからなかった。それで、LGBT の人たちが出入りしそうなところに自分たちからアクセスしたり、グループやコミュニティづくりからサポートしたりした」という話を聞きました。それで、学習会のような交流する場、コミュニティづくりをしようと思い、学習交流会を始めることにしました。

最初の交流会に来たのは、5人くらいでした。でも、そのうちの2人は、私の母と母の友人(笑)。だから、そこで初めてお会いしたのは3人です。「上川さんが来たら、人が集まるかな」と思いつつ、「1人も来ないかもしれない」とも思っていました。ネット上だけの活

動で、誰がやっているグループかわからないし、震災のあとに突如始めたグループにアクセスしようと思わないですよ、やっぱり。困ったときは、普段から関係がある人に頼ろうと思うわけですから。

上川さんと呼ぶための経費は、イギリスとドイツ在住の友人たちがファンドレイジングで集めてくれたお金を充てました。「LGBT 支援のためだったら何に使ってもいい」「これで何でもして」と言われて。それから、その友人がプロのデザイナーを紹介してくれて、岩手レインボー・ネットワークのロゴを、岩手山のロゴなんですけど、作ってくれました。もらった寄付の中から、お礼を渡しました。

交流会は、最近は月1回のペースでやっていますが、2011年7月のあと、2回目は2011年12月だったと思います。当時は、場を設けていけば、被災地域から参加してくれる人もいるかもしれない、とっていました。

◆交流会は「当事者オンリー」ではない

交流会は「LGBT 当事者オンリー」ではありません。そういうグループにしたら、そこに出入りするだけでアウティングにつながることもある、と友人から言われていました。「この人はなぜ来たのだろうか」と思う人もいます。でも、関心があるから来ている。何回か来ているうちに、「実は子どもがセクマイで」という話をしてくれた、ということもあって、「当事者って誰？」と思うようにもなりました。

東京のような大都市部だったら、当事者オンリーにして、それこそアイデンティティ別の活動が成り立つと思います。でも、うちのグループは、始めた頃なんて本当に人も少なかった。「今回はレズビアンだけ」というようなことをしても、人が来るか、わかりません。

交流会のグラドルール、たとえば「誰が来ていた、ということは口外しない」といったことは、最初から毎回確認しています。セクシュアリティは、こちらから聞かないです。もちろん、話したい人には、自由に話してもらっています。そうしているうちに、当事者もそうでない人もいろいろな人が来て、それでも大丈夫だ、という感覚をもったので、「関心のある人なら誰でも来ていい」という形で続けています。

交流会に来た人たちの名簿は、つくっていません。ただ、途中から、実績を参加人数で示せるように、人数の記録をとるようにしました。呼ばれたい名前とメールアドレスもわかりますが、きちんとリスト化はしていません。

◆シスジェンダー男性の参加

少人数ですけど、シスジェンダー男性、バイセクシュアルと自認なさっている男性やゲイの男性もいらっしゃいます。生まれが岩手で、現在の居住地が岩手でないので、機会があれば、というその方は、ゲイ男性の中だと緊張してしまう、男性自認でない人と話すほうが安心する、とおっしゃっています。

あとは、盛岡市の広報に「岩手レインボー・ネットワーク」のことを書いてもらったら、「ゲイ男性です」とメールをくださった方がいました。こちらからお返事したんですけど、メールが戻ってきてしまって、うまく連絡が取れませんでした。

もう1人、「知的障害があって、ゲイです」とオープンになさっている方がいます。その方の場合は、いつも「今月の集まりはいつですか」と連絡をくださるのですが、ほとんどいらっしゃることがなくて。就労支援の支援員の方が、つながりたいということで、一度だけ、支援員さんと一緒にいらっしゃったことがありました。経済的な問題もあるようです。会場までのバス代が足りないとか、忘年会や新年会の会費とか、「お金が足りないから行かれない」「今月はいくらかかりますか」と連絡をよく下さって、案内もしているのですが、それ以来、いらしたことはないです。

「いわてレインボーマーチ」(2018年9月1日、本冊子にインタビュー掲載)が終わったあとに、東京から来ていた友人がゲイバーに行って、その辺のことをリサーチしたらしく、「『あなたたち、今日こういうイベントがあったのに、どうして歩かなかったの』って聞いておいた」と言われましたが、まだ報告を聞いていません。盛岡には、ゲイバーが5件くらい、あるらしいんですね。ゲイバーのママが初めてカミングアウトして、パレードに協力したとは聞いたんですけど、岩手の団体では、シス男性のゲイはマイノリティです。

岩手レインボー・ネットワークの場合、社会的な地位があって、経済的に困っていないシス男性のゲイは、そこに関わることの意義が見出せないかもしれないです。継続的にいらっしゃっているバイセクシュアル男性は、ご自分が困っているというより、ユース支援をする中でいろいろな人とつながりたい、ということで参加してくださっていると、私は理解しています。

◆学習交流会の意義

交流会は、居場所というか、つながれる場をつくることを目的で始めたんですけど、やっている意味を実感することは、何回かありました。「こういう場がほしいとずっと思っていた」と沿岸に住んでいる方から言われたり、「1か月に1回はホッとできる場がある」と言われたり。私は時々、忙しくてしんどくなると、事務的にこなす感じになってしまうんですけど、来る人はそうじゃない。初めての参加だったら勇気がいるし、「自分はこれに困っていて、これが知りたいと思って来た」という人もいます。そこで、「あそこで手術した」「この先生にかかっている、あの病院はいい」とか、「役所の窓口で嫌な思いしたときに、どう切り返せばいい」「こうスルーすればいい」といった情報をシェアしているのを見ると、場をつくったことの意味を実感します。

ユースたちが「いわてレインボーマーチ」を開催して、そのグループもミーティングをしているので、「岩手レインボー・ネットワークの交流会はお休みしてもいいのかな」「存在する意義がどれくらいあるのかな」と考えたこともありました。でも、雰囲気の違いもあるので、まだ必要とする人もいるかもしれない、と思っています。

驚くことに、すでに8年目に入っていますが、いまだに月に1人か2人、「初めてなんですけど」という新しい人が来ます。1人でも2人でもニーズがあるのなら、続けたほうがいいのか、という私自身の気づきは、収穫の1つです。

◆課題

場を維持することで、1か月に1回の安心を提供できたり、参加した人の意識が変わったりすることはあるかもしれない。でも、多くの人の考え方を換えられるわけではない。やはり、社会の制度が変わらないと「ホッとできるのは1か月に1回だけ」という状況が変わらないので、システムを変えることに手を着けなければいけない、という思いはあります。そして、それを先延ばしにしている、という問題意識をもっています。だから、パレードも終わったことだし、それを形にする方法をみんなで考えていくことを始めたい。

いわてレインボーマーチの方とも話したのですが、いま、同性パートナー制度がわかりやすい形で取り上げられているけれども、岩手で一番必要なのはそれなのか。岩手レインボー・ネットワークに来る人たちは、パートナー制度は身近でない、と感じている人もいます。それ以前に「どこで出会ったらいいですか」という質問が来る。ユースは学校で困っているかもしれないし、私が勝手に支援している人は、仕事の問題が切実だし、障害のある人も来てくださっているし……。困っていることだけでなく、「こういうところは生活しやすい」という地域性も共有しながら、考えていきたいです。

4. にじいろ防災ガイド

◆それ以前の困難

2014年には、「東日本大震災からの復興支援にかかるジェンダー平等をめざす藤枝濤子基金」から助成金をもらい、『にじいろ防災ガイド』(2016)を作りました。大規模災害で復興が長期化するときに、どの段階でどういう困難や不安があるのかを可視化しようとしたものです。

学習交流会の中で、震災の話が出ることはありました。震災から何年目かに、防災をテーマにしたときには、「実はそのとき、こういう状況で」とか、「あのときは岩手にいなかったけど、こういうことを不安に思っ」といったことを話す人がいました。

ですが、すでにお話したように、「セクシュアル・マイノリティで被災した」という認識やエピソードが出てくることは、稀でした。他方で、防災関係者の人たちからの関心は高まっていた。これは、防災関係の人たちの意識を変えるチャンスかもしれないのに、「何か資料ありませんか」と言われて、「これ」と示せるものがなかった。それで、助成事業に応募しました。

災害関係の人たち、マスコミの人たちから時々連絡をもらったのですが、かれらが期待している「LGBTの災害時の困難」というのは、「避難所でトイレを使おうとしたら駄目だと言われた」「物資を取りに行ったら差別的な対応をされた」「同性パートナーと一緒に仮設住宅に入れなかった」とか、そういうことを暗に期待しているのが伝わってきました。

でも、少なくとも、私が岩手の現状について認識したのは、それ以前の困難です。たとえば、トランスジェンダー女性で、災害があったときに沿岸で働いていた。彼女は自分がトランスだということを誰にも言っていない。「言えない」ということが最大の困難なのですが、トランス女性だと他者に認識された上での困難を経験していない。

あるいは、シス女性とトランス男性のカップルがいて、トランス男性の実家が被災したので、2人で駆けつけた。トランス男性は、家族にもカミングアウトをしておらず、彼女のことを「友だちが支援に来てくれたよ」と説明して、泥かきや片付けを手伝った。傍目には「娘が女友だちを連れてきてくれた」という話で、何の問題もない。関係性を明かせば、否定とか拒絶とかの反応があるかもしれないのですが、そこまでも行かない段階なわけです。そういう段階について、「岩手のLGBTは困難がなかった」と言っているものか、もっと前の段階だ、というところを伝えるのが難しいです。

◆困難を想像するワークショップ

「LGBTとして認識された上での困難」を経験していなくても、でも、「もしトランス女性として生活していたら、あのとき、こういうふうに困っただろう」ということを、想像することはできるわけです。それで、実際に経験した困難だけでなく、困難を想像する作業を試みようと、ワークショップをしてみました。

「災害が起きました。地震です。何秒で津波が来ます。移動します。体育館に着きます」というタイムフレームや資料をある程度こちらで準備して、災害の段階ごとに、たとえば「レズビアンでパートナーがいる。あのとき体育館の避難所に避難していたら、一緒にいられたか」ということを、それぞれに想像していく。心理的に負担の大きいことだったと思うのですが、そういうワークショップをやって、『防災ガイド』にまとめました。

『防災ガイド』ができてから、何回か交流会で防災をテーマに取り上げました。でも、「巷はLGBTブームで、岩手でも『にじいろ防災ガイド』ができたけど、実際にまた災害があったときに、自分がセクマイで困っているということは、とても言えない」「家族が亡くなっている、家がなくなっている、という状況の中で、自分のセクシュアリティは後回し」「セクマイだと説明することも考えにくい」と言っていました。「ああ、変わったつもりになっていたけれど、そんなに変わってないよね」と思いました。

5. その他の活動

◆講座依頼

最近では、講座依頼が来るようになっていて、できるだけ受けるようにしています。岩手県内の講座だと、「地元で縁のあるグループや人に話をしてもらいたい」というニーズがあります。「災害とセクシュアリティ／ジェンダーについて考えたいから話題提供をしてほしい」という依頼もあります。東北以外の地域で、「セクシュアル・マイノリティと震災」というテーマに関心をもつ人が増えているようです。

自分のセクシュアリティを言う前から、講演することはありません。聞かれれば言いますが、「大学で働いて、これを専門にしている人」と認識されて、「今度、当事者の人を紹介してください」と言われたこともあります。セクシュアリティを話すと、色眼鏡というか、「LGBTってこういう人」という先入観で見られるかもしれないので、戦略的にそうしている、ということもあります。

それから、人間関係の濃さの問題もあります。私のことを産まれたときから知っているとか、親が離婚したことを知っている、といった濃い人間関係の中で、セクシュアリティを進んでは言わない、という選択は、あり得るのではないのでしょうか。たとえば、自分はいいけれど、家族や親戚のことを考えたときに、明かさなくてもいいなら明かさないでおこう、という人はいると思います。

◆行政との協働

NPO 法人にしなくても、行政と協働できます。最近、行政からのアプローチも増えてきました。自治体による市民向け講座や、管理職向けの研修に呼んでくださったところもありました。今年、岩手県の審議会の委員になりました。私が大学で働いていることも関係しているとは思いますが、細くても継続して活動してきたことが評価されているのかもしれない。

◆助成金獲得事業

藤枝滯子基金の事業は、岩手レインボー・ネットワークでやったのですが、助成金は、いったん個人で受けました。団体でアプライするには規約などの提出が必要でしたが、理事会や総会があって、会員リストや会費があって、というようにはしていない。会則や規約もない、という事情を説明して、個人口座に振り込んでもらいました。

LUSH とは、「チャリティポット」というプロジェクトを3回ぐらいやりました。LUSH の店員さんと一緒にお店に立って、お客さんと話をし、チャリティポットを買ってくれたら、そのお金が岩手レインボー・ネットワークに入る、というものです。

盛岡市からは、何回か講座を助成してもらいました。講座を企画して、盛岡市にプロポーザルを出して、採択されたら講座ができる。講師を呼ぶ旅費や謝金を、上限5万円を出してもらえます。「もりおか女性センター市民団体支援事業」というものなのですが、「共催・もりおか女性センター／盛岡市」と書いていいので、ありがたいです。団体を信頼してもらえます。

6. 岩手県内の活動の広がり

◆釜石レインボー・グループ

最近、技能実習で来日している外国人の方が交流会に来てくれています。置かれている環境はすごく厳しいと思います。困っている人の声は、いちばん困っているときには聞こえませんが、交流会に来ている人たちからは困っていることを聞かせてもらっているので、見えている課題だけでも取り組んでいけたらいいな、と思います。

岩手もグループが増えて、たとえば、英語を教えている外国人の先生たちが中心になっている「釜石レインボー・グループ」があります。岩手レインボー・ネットワークに参加して下さっていた方が、知り合いに声をかけて始めました。グランドルールは、そのまま使ってもらっています。

岩手レインボー・ネットワークは、日本語と英語の両方で発信しています。だからなのか、JET プログラムで岩手に来た方が、これまでに数人ほど参加してくれています。英語の先生たちは、みんなが自分のことを知っている、というところで生活しているので、地域に溶け込むために、カミングアウトについては慎重です。

震災のとき、岩手の沿岸部で被災した外国人のゲイ男性がいました。「グループに来ませんか」と誘いましたが、「出入りしているのを生徒や保護者に見られたら、説明ができない」と言っていました。普段の職員室でのやりとりや、生徒同士のやりとりを聞いていて、「ここではカミングアウトはしない」と判断したようです。「岩手レインボー・ネットワークは、当事者に限定していないですよ」とも言ったのですが、その方は一度も交流会に来ないで、帰国しました。震災でアパートや車が流され、避難所で炊き出しボランティアに加わる経験もなさっていますが、それも語らないまま……。

釜石レインボー・グループは、素敵な人たちがやっていますから、ぜひ行ってみてください。釜石は、ラグビー・ワールドカップのホストシティのひとつなのですが、市長がそれこそ LGBT プームに乗っておられるようで（笑）、「外国からたくさん人が来るなら、LGBT の人もいるかもしれないから、市民向けに LGBT 講座をなささい」とのことで、去年、私も講座をしにお邪魔しました。市役所には、男女共同参画に熱心に取り組む担当者がおられます。

女性支援グループも LGBT のことに関心を持っています。11月に釜石のショッピングモールで、女性に対する暴力に反対するパネル展があるらしいのですが、LGBT のこともパネルに含めて展示したいと連絡が来ました。

◆いわてレインボーマーチ

いわてレインボーマーチの中心メンバーは、大学に入学してすぐに学習交流会に来てくれたような、もともとすごい行動力のあるユースです。マーチの前に、学習会でプランを発表してもらったり、私がフライヤーの添削をしたり、といったつながりがあります。

自分より若い人が育たなかったら、せっかくできたつながりやコミュニティが途切れてしまうかもしれない、という問題意識はもっています。ちょっと疲れたらバトンタッチしたい、と思うこともありますし、青森や秋田でも同じような課題を抱えています。それで、今年（2018年）の2月に、「北東北性教育セミナー実行委員会」として、人材育成の合宿セミナーをしました。そこに、いわてレインボーマーチのコアメンバーも来てくれました。

フィリピンから、知り合いのトレーナーに来てもらい、自分やコミュニティの持続可能性に関するワークショップをしてもらいました。「どういうところに住みたいのか」「そう思ったら、変えなくてはいけないことは何か」「変えようと思ったら、どういう人と関わらなければいけないか」ということを具体化するようなワークショップです。グループをオーガナイズする方法や注意点なども含めて、教えてもらいました。

いわてレインボーマーチのメンバーは、マーチのアイデアがあったので、セミナーに参加してくれたのかもしれませんが。セミナーから得るものがあって、今後に活かしてくれていたらいいな、と思っています。